「外国語活動」における Communication Abilities の考察

――定義とその素地の育み方及び見取り方について――

渡　邉　寛　治*

［要旨］ 2008 年度に新学習指導要領が公示されて以来、筆者は全国各地の教育関係者から「外国語活動におけるコミュニケーション能力（Communication Abilities）の素地とは何か」また、「その育み方と見取り方のポイントは何か」という質問を受けてきた。そこで、この用語の定義とその内容に関するさまざまな諸問題について考察する。Ⅰでは Communication Abilities の素地とは何か、Ⅱでは Communication Abilities の素地の育成方法と評価の在り方及び方法の留意点について論考する。

Ⅰ．Communication Abilities の素地とは何か

Ⅰ.1　小学校の「外国語活動」は教科ではなく、2011 年度より領域として第 5・第 6 学年においてそれぞれ年間 35 時間（計 70 時間）実施される。その目標は次のとおりである。

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」

'To form the foundation of pupils' communication abilities through foreign languages while developing the understanding of languages and cultures through various experiences, fostering a positive attitude toward communication, and familiarizing pupils with the sounds and basic expressions of foreign languages.'

『小学校学習指導要領解説 外国語活動編（以下、『解説書』)』（文科省，2008.8）によれば、「目標の要点」の項目において、「外国語を用いて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点を置いた」と明記している（p.6)。即ち、児童の「コミュニケーションへの興味・関心・意欲（積極的な態度)」等の「見えにくい学力（資質)」の育みを重視している。

＊教授／英語教育

同時に、「外国語活動の目標を、コミュニケーション能力の素地を養うこととし、中学校との連携を図った。」と解説している。このことは、上記の目標文の文科省英訳試作版‘To form the foundation of pupils’communication abilities through foreign languages while ① developing…, ② fostering…, and ③ familiarizing….’の下線部からも、「外国語活動」の最終的な目標は、①～③の活動をしながら Communication Abilities（ability[1)]：a level of skill or intelligence：技能、知能、知性、理解力、思考力）の素地を養うことであると理解できる。したがって、今後は小・中連携の国際教育・外国語（英語）教育の観点から、この「Communication Abilities の素地」の意味を正しく理解しておく必要がある。この点について、『解説書』では次のように述べている。

「コミュニケーション能力の素地とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものである。これらは、中・高等学校の外国語科で目指すコミュニケーション能力を支えるものであり、中学校における外国語科への円滑な移行を図る観点から、目標として明示したものである。」（pp.8-9.）

それでは、中学校の「外国語」で目指す国際的に通用する Communication Abilities とはどのようなものであろうか。1998 年度に改定された現行の中学校学習指導要領「外国語」の目標は、次のとおりである。「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」である。また、新学習指導要領「外国語」では「読むこと」「書くこと」の言語活動が明示されたことと、「実践的」という言葉は、「2 の内容（1）言語活動」の項で取り扱われており、基本的に大きな変更はない。

次に、高等学校「外国語」では科目が再編成され、2013 年度より「（4 技能を総合的、統合的に育成するための）コミュニケーション英語 基礎、コミュニケーション英語Ⅰ（共通必履修）、コミュニケーション英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ」の他に、「（論理的表現力を育成するための）英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ」、「（会話中心の）英語会話」の計、7 種類の新科目に変わる。これらは、文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室が、新学習指導要領の着実な実施や総合的な英語教育システムの構築を目指し策定した「英語教育改革総合プラン 2009」より推進されている。

したがって、小学校「外国語活動」の目標及び内容は、小・中・高の教育の接続を意識して策定されたといえよう。国際的に通用する Communication Abilities の素地を養うためには、小学校段階より外国の人と音声中心の対人コミュニケーションを体験させる必要がある。その際、児童の「主体性（identity）」を重視しながら「言語の使用場面や働き」を取り入れたカリキュラムを開発して指導することが大切である。このことは中・高のコミュニケーション重視の外国語教育においても同様である。これまで、中・高の学習指導要領や解説書では、小学校の「外国語活動」と同様に一人ひとりの生徒の「考え・意図（Abilities）」などを伝え合うために、「言語の使用場面と働き」を重視した活動を行うように促してきている。これらは、小学

校での Communication Abilities の「素地」、中学校での「基礎力」、そして高等学校での「活用力」を養う上で重要な言語活動だからである。

Ⅰ.２　Ⅰ.１で述べた Communication Abilities の素地とは、主に発話者の「考え、思い、意図、意志（思考力・判断力等の Abilities）」をベースとする「談話能力」の素地である。これらは、人と人が談話をする上で不可欠な能力である。したがって、日本語によるコミュニケーションでも重要な能力である。しかしながら、これらの能力をベースに欧米人とコミュニケーションを図る際には日・欧米の文化間で違いがあるので留意する必要がある。

日本のコミュニケーション文化には、年齢や男女において差はあるものの、自己の考え等を「明瞭且つ積極的に述べるより、多少控え目に述べる」ことを好しとする傾向がある。小さな島国で長い間鎖国も行い、ほぼ単一民族に近い国家として発展してきた我が国には、「以心伝心」という言葉が存在するとおり、言葉で明瞭且つ積極的に伝えなくても理解し合える文化があるからである。

一方、欧米等の社会では個々の考え等をベースに、上述の「談話能力」を有効に働かせて「積極的にコミュニケーションを図る」ことを好む傾向がある。陸地続きの欧州諸国や多民族国家の北米等には、円滑なコミュニケーション生活を営むために、人々は言語・非言語を用いて「自己の考えや気持ち等を明瞭且つ積極的に伝えあう」ことを好しとするオーラル・コミュニケーション（口頭コミュニケーション）文化が存在する。

しかも、彼らのオーラル・コミュニケーションでは、丁寧表現等で代表される「社会言語学的能力」を含む「ソーシャル・スキル（人間関係構築力に関する資質・能力）」が重要視される。例えば、人の良い点を見出し認めたら彼らは言葉で褒め合ったり、人に何かをしてもらったら感謝の気持ちを言葉で明瞭に表現したりする。また、初めて出会った人に対しても「アイ・コンタクト」をとりながら親しげに挨拶を交わしたりする。これらは互いの「人権尊重」を基盤とする人間関係重視の彼らのコミュニケーションの現れであり、国際的なコミュニケーションの場では極めて重要な資質・能力である。それ故、ALT 等との「外国語活動」を通じて斯様な国際コミュニケーションの素地も育まれる。

ところで、「外国語活動」ではグループによるコミュニケーション体験活動を通して「ソーシャル・スキル」が育まれる。例えば、活動中、外国語でどのように伝えればよいのか迷っている児童に対して児童間で助け合ったりするシーンが見られる。そこでは、友達を「思いやる心」が働いており、国際教育で求められる道徳性（国際コミュニケーションの素地）の育みが見られる。それ故、小学校学習指導要領においても「第 3 章 道徳の第 2 に示す内容について、外国語活動の特質に応じて適切な指導をすること」と明記している。

そこで、「道徳」の第 2〔第 5 及び第 6 学年〕に示す内容のうち、1992 年の英語活動の実験当初より育まれてきた資質・能力について述べる。先ず、内容 1 の「自分自身」については、「明るい心で楽しく、進んで新しいものを求める」。次に、内容 2 の「他の人との関わり」に

ついては、「誰に対しても思いやりの心をもち、友情を深め、男女仲良く協力し助け合い、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にし、人々の支え合いに感謝し、それに応える」。さらには、内容 4 の「集団や社会との関わり」については、「誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく公平に努め、身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす」など。したがって、外国語による体験活動を通して、斯様な国際コミュニケーションの素地を小学校段階から育成する意義は大きい。なぜなら、これらの道徳性は「生きる力」と同心円内にある資質・能力だからである。

Ⅰ.３　小学校「外国語活動」の教育内容は『小学校学習指導要領 第 4 章 外国語活動（以下、『指導要領』）によれば、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」と「言語や文化について体験的に理解を深めること」の 2 点である。そのうち、『指導要領』の解説書では、「主体性」（identity）の育みのきっかけになる「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度（資質）の育成に重点を置いた」としている。その「積極性（国際コミュニケーションの素地）」を育むためには、下記の表（M. Canale:1983）の太線で囲った 3 つの Communicative Competences（Abilities）の育成を考慮しながら、「聞くこと」や「話すこと」重視のコミュニケーション活動のカリキュラムを編成し指導する必要がある。

なぜなら、国際的なオーラル・コミュニケーションの場では、①ソーシャル・スキル（人権尊重を基盤とする人間関係構築力）、②談話スキル（個の考えや気持ち等を互いに尊重しながら論理的に談話する力）、③方略的スキル（会話の豊かさや持続性を保つために、相手の発話を聞き返したり、繰り返したり、言い換えたりする、言わば「確認行為」をしながら有効にコミュニケーションを図る力）などが求められるからである。なお、「言語学的能力」については、読み書きだけでなくオーラル・コミュニケーションにも不可欠なスキルであるが、小学校段階では言語の正確な習得状況を見取らない。言語スキルの「でき不でき：定着度」を目標とし評価すると、児童が「授業嫌い」になるからである。この「言語学的能力（文法等）」の習得状況に関する評価は、中学校段階で行うことになっている。

ところで、下記の表の 4 Communicative Competences を養うには中長期間を要する。したがって、小学校における体験重視の「外国語活動」では、国際コミュニケーションで求められる「（人権尊重をベースとする）対人関係に必要な資質と能力の素地」を養うべきである。言葉そのものについては、言語学的な「正確さ」よりも、短い表現でもよいから使用上の「適切さ」を重視した体験的コミュニケーション活動を行うことが重要である。

具体的には、発音や文法上多少の不正確さがあっても、円滑な対人関係を保つには不可欠な「挨拶や感謝の気持ち」等を適切に述べたり、「相手を思いやりながら自分の気持ちや考え等」を言語・非言語で適切に伝え合ったり、また、別れるときには、挨拶をきちんと交わすなど、「外国語活動」では、国際的なコミュニケーションの場で求められる資質・能力の素地を養うべきであろう。

表：M. Canale（1983）[2)]

	Language Activities（言語活動）	4 Communicative Competences（4 つのコミュニケーション能力）			
		Linguistic Competence（言語学的能力）	Sociolinguistic Competence（社会言語学的能力）	Discourse Competence（談話能力）	Strategic Competence（方略的能力）
Recognition（認知）	Listening Reading	Pronunciation Vocabulary Grammarなどの「言語の規則」に関する能力	即ち、Social Skill（人間関係構築力） 例、Politeness（思いやり）など	Logicality（論理性）and Continuity（論理の関連性）with cohesion（文法的結束）and coherence（首尾一貫性）などを重視	Restatement（言い換え//繰り返し）など ※コミュニケーションを「持続」または「豊か」にする方略
Production（産出）	Speaking Writing				

Ⅱ．Communication Abilities の素地の育成方法と評価の在り方及び方法について

Ⅱ.1　小学校「外国語活動」の最終的な目標は、既述したように、中学校「外国語」の目標や内容と連携を図った Communication Abilities の素地を養うことであり、その教育内容は、⑴「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるように指導すること」と⑵「日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるように指導すること」の 2 点である。そこで、Ⅱ．では、国際コミュニケーションの場では不可欠な「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度（資質）」を育むには、何をどうすればよいか、また、その資質の見取り方について考察する

オーラル・コミュニケーションにおける積極的な態度を育むには様々な方法が考えられる。そのうち、次に述べる手立ては、最も基本的な方法の一つである。目に見えにくい学力といわれる「関心・意欲（積極性）」を育むには、先ず、児童の心的発達を考慮する必要がある。つまり、児童の「したいこと」「言いたいこと」は何かを重視すべきである。例えば、高学年の活動においてフルーツ・バスケットやジャズ・チャンツのような主に右脳の働きを利用する「外国語活動」を 40 分間続けることは難しい。高学年は論理的思考を司る左脳の働きが活発な時期故、そのような単純な活動に対して長くは興味を示さなくなるからである。

次に、「コミュニケーションの場面とコミュニケーションの働き（機能）」を重視した活動を考える必要がある。真のコミュニケーション力（資質・能力）の育みは、実際的なコミュニケーションの場における体験活動を通して育まれるからである。したがって、先ず『指導要領』や『英語ノート』にも紹介されているように、高学年の児童にとって身近なトピック（例えば、買い物、将来の夢など）を選定すべきである。次に、活動を通して育みたい Communication Abilities を決定する。その際、コミュニケーションが豊かに行われる「コミュニケーションの働き」を取り上げることが重要である。

ここで、Ⅰ.３の Communicative Competences の表（Canale：1983）を用いて育みたい能力（Abilities）を確認してみよう。例えば、買い物で自分のほしいものを店の人に積極的に伝える力を育成するとしよう。これは「談話能力（考えや意図等）」をベースに自分で買いたいものを決定し、行動する力（国際教育で求める資質・能力；主体性）の育成に繋がる。一般に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度（資質）」は、「談話能力」をベースに育まれる。したがって、この能力が発揮される際のパフォーマンス状況を見取ることが「積極性；主体性」の育まれる様態を見取ることになる。

それでは、具体例を挙げて説明する。活動のトピックは、*Let's Go Shopping!*　具体的には、果物屋での買い物活動で、3/3 回目とする。活動のクライマックスにおいて、次のようなオーラル・コミュニケーションが交わされる。

A（店員）：Hello! ― B（客）：Hello! // A：May I help you? ― B：Yes. アップル . // A：Pardon?（↗）― B：アップル , please. // A：Apple?（↗）― B：Yes, apple. // A：How many? ― B：スリー. // A：Three apples?（↗）― B：Yes, three . // A：Anything else? ― B：Watermelon, please. // A：How many? ― B：Two, please. // A：OK.（以下、省略）

このようなコミュニケーション活動の場合、評価規準はねらいとの関連から「果物屋で、自分の買いたいものを決め、店員に進んで伝え（ようとし）ている」が考えられる【(考え等の「談話能力」をベースとする）積極性の見取り】。具体的には、客が自分の買いたいものを決定し、店員に一生懸命伝えようとしているパフォーマンス状況を見取る。その時、使用言語の発音や文法上の正確さについて見取る必要はない。尚、A と B の「確認のやり取り」は、英語特有の「コミュニケーションの豊かさと持続性（「方略的能力」）」の育成に繋がる。それ故、このやり取りのルール化を活動の中に取り入れるとよい。

Ⅱ.２　小学校における「外国語活動」では、読み書きの力を身に付けるための言語スキル学習をするのではなく、コミュニケーションの原点ともいうべき人と人が直接行うコミュニケーション体験活動を行う。そこで、ここでは外国語（英語）による国際的な Person-to-Person Communication（以下、P-P-C）で求められる資質・能力の素地とその育み方並びに見取り方のポイントについて考察する。

英語による P-P-C では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度（主体性）」が求められる。この資質の素地を育成するためには、「気持ち、思い、考え、意図、意思」等をベースに、児童一人一人の「主体性」を重視した活動内容を構成し、児童が自ら自己開示し自己実現できるような活動の流れと環境作りに心掛けて指導する必要がある。したがって、「積極性（資質）の見取り方」は、既述したように「児童が自分の考えや意図（Abilities）をベースに、意欲的に（進んで）コミュニケーションを図っているかどうか」がポイントになる。なお、このことは、中学校「外国語」が目指すコミュニケーション力（資質・能力）の基礎の育成にも繋がる。

このような個々の「主体性」重視のコミュニケーション活動は、左脳の発達をみせる高学年には適した教育であるとともに、国際的なコミュニケーションの場でも求められる重要な教育内容である。それ故、この種の活動は、異文化（例：発想や価値観の違い）等について体験的に理解を深めることにもなる。ところで、この「主体性」やその源泉である積極性を育むには、児童の興味・関心事が何かを重視する必要がある。このことは、コミュニケーション活動のトピックを選ぶ際の第一条件とすべきである。次に、国際的な P-P-C におけるコミュニケーション力を育むためには「コミュニケーションの働き（機能）」を重視すべきである。文科省は、1989 年の中学校学習指導要領「外国語」の改訂時以来、この教育理念を導入している。したがって、小学校の「外国語活動」でも、この「コミュニケーションの働き」はカリキュラムの開発と指導の在り方において重視されている。小学校における「コミュニケーションの働き」の具体例としては、「気持ちを伝える」「考えや意図を伝える」「事実を伝える」「相手との関係を円滑にする」「相手の行動を促す」などが掲げられている。

例えば、「将来の夢」におけるコミュニケーションを考えてみよう。

A：What do you want to be?（何になりたい？）― B：Soccer player. // A：Why? ―
B：（Because）I like soccer. // A：Great!（すばらしい！）// B：Thank you.

先ず、A は B に対して質問することで相手の行動を促している。次に、A も B も「談話能力とソーシャル・スキル（資質・能力）」を用いて、自己の思いや人を思いやる心を明瞭に伝え合っている。具体的には、B は自分の考え（将来の夢）を決定し伝える。A は B にその理由を尋ねた後、B の返答を褒める。それに対して、B は感謝の気持ちを伝える。相手との関係（ソーシャル・スキル［人間関係構築力］）が円滑に行われている。いずれも国際的な P-P-C には不可欠な資質・能力の素地である。したがって、このような観点から指導と評価の在り方を行うことが大切である。

Ⅱ.３　上記のⅡ.２では、英語による国際的な P-P-C で求められる資質・能力の素地とその育み方並びに見取り方のポイントについて、例を挙げながら考察した。そこでは、基本的には「談話スキル（考え・思い・意志・意図などの Communication Abilities）」をベースにコミュニケーションを図ることが、学習指導要領で重視している「積極的な態度（資質）」の育みに繋がることを論述した。そして、積極性（主体性）を育むためには児童の考え等を発信する場面を設定することと、その資質を見取る際は、児童が考え等の能力を有しているかどうかがポイントになることを解説した。ここでは、その能力（「談話スキル」）をベースに「方略的能力（スキル）」も英語によるコミュニケーションでは重要な素地・基礎である故、取り上げることとする。

「方略的能力（strategic competence）」とは、相手のことを思いやりながら「コミュニケーションを豊かに持続する力」のことである。具体的には、「相手とのコミュニケーションを続けるために、相手の発言内容を確認したり、明確にするために聞き返したり、念を押したり、例を

挙げて言い換えたりして相手とのコミュニケーションを円滑に図る言語行為のこと」を意味する。英語圏のコミュニケーションでは頻繁に見られる行為である。

例えば、ショッピングにおいて、しばしば店員と客は品物を確認しながらコミュニケーションを図る。次の対話例を参考に「方略的能力（スキル）」について考察してみよう。

A（店員）：Hello! // B（日本人客）：Hello! // A：May I help you? // B：Yes. キューイ。// A：What? // B：アイ・ウォント・キューイ。キューイ、プリーズ。// A：Pardon? // B：キーウィー、プリーズ。// A：Oh, kiwi? ↗ //B：Yes, kiwi. // A：OK! How many ? // B：ハウメニー？↗ // A：（指で示しながら）One? ↗ Two? ↗ Three kiwis? ↗ // B：Oh, サーティーン、プリーズ 。// A：Thirty or thirteen? // B：（指で示しながら）サーティーン。// A：Oh, thirteen kiwis? ↗ // B：Yes, thirteen kiwis. // A：OK!

ここでは、先ず、A も B も、全て「談話スキル」を用いて互いに考え、意図等を伝え合っている。次に、対話のうち、下線部は「方略的スキル」でもある。なぜなら、互いに相手の発言内容を確認するために、聞き返したり、念を押したり、ジェスチャー等も含めて具体的に言い換えたりしてコミュニケーションを円滑に図っている。それ故、ここでは「方略的スキル」が頻繁に用いられており、その結果、双方のコミュニケーションが豊かに持続しているといえよう。しかも、B の「プリーズ（please）」という発話は、相手に対して「思いやり」の気持ちを発信しており、これは国際的コミュニケーションでは重要な「ソーシャル・スキル」である。

これまで、小学校における「外国語活動」では、中学校に繋がる Communication Abilities の素地を養うことが究極の目標であると述べた。したがって、この例にみるような「豊かに持続する能力（方略的スキル）の素地」も育むようにしたいものである。『指導要領』第 4 章「外国語活動」の 2 の内容で「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること」と「言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること」が求められているからである。具体的には、友達同士や ALT との体験的コミュニケーション活動を行う際に、相手を思いやりながら、互いに相手の発話内容を確認するように指導すればよいであろう。因みに、このような活動は「音声や表現等の慣れ親しみ」に繋がるといえよう。尚、その際の見取り方のポイントは、「互いに確認し合っているかどうか」である。

Ⅱ.４　何度も繰り返すが、小学校「外国語活動」の目標は、中・高の国際教育・外国語（英語）教育が目標とする「国際的に通用するコミュニケーション力（資質・能力）」の素地を育もうとするものである。小学校「外国語活動」では、その素地の一つである「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度（資質）の育み」に重点をおく。これまで、その積極性を初めとするコミュニケーション力（資質・能力）の育み方と見取り方のポイントについて考察してきたが、ここでは、その原理についてもう少し詳しく論考する。

先ず、国際的に通用するコミュニケーション力や国際社会で求められる態度・能力とは、どのようなものであろうか。このことについて、文科省は次のように明示している。

①「異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力」
②「自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力」
③「自ら国の伝統・文化に根ざした自己の確立」
すなわち、「共生の心；思いやり（benevolence）」、②「自己決定・行動力（initiative）」、③「主体性（identity）」の 3 つの資質・能力である。[3)]

このうち、③ の「アイデンティティー」については、西洋の人々と比較すると多くの日本人は育ちがやや遅いと言っても過言ではない。一般に、この資質・能力の育成には時間を要するが、③ を養うポイントは「主体性」の育みにつながる「積極性」を育成することである。そして、その「積極性」を育むためには、② の「自己決定・行動力」の育成を考慮した体験的コミュニケーション活動を計画し実施することである。なぜなら、自分で決定し行動できる資質・能力は、「積極性」と深い関係にあるからである。

では、具体例を挙げて説明する。活動のテーマ：「将来の夢」。活動目標：「将来、自分のしたいことについて伝え合う」。評価規準：「将来つきたい職業について、互いに進んで尋ねたり答えたりしようとしている（評価観点：コミュニケーションへの関心・意欲・態度）」。

A：Hello!// B：Hello!// A：Can I ask you a question? // B：Yes. // A：What do you want to be? // B：Teacher. // A：Teacher ? ↗ // B：Yes, teacher. // A：Why? // B：（Because）I like children. // A：Wonderful !

ここでは、基本的に A も B も「談話スキル」を用いて自己の思い・考え・意図・意志等を伝え合っている。具体的には、先ず、両者とも「談話スキル及びソーシャル・スキル」を働かせて挨拶を交わした後、A は両スキルを働かせて、相手に質問をしてもよいかどうか許可を求めている。これは相手への「思いやり」の現れである。次に、将来の職業を尋ねられた B は、「自分の考え等（Abilities）」を自己決定し伝えている。その後、A は「方略的スキル」を働かせて B の発言内容を確認するとともに理由（「談話スキル」）も尋ねている。それに対して、B は自己の考え等（Abilities）を明快に伝えている。最後は、A が「ソーシャル・スキル」を働かせて B の発言に対して、Wonderful ! と発信し「相手を思いやる気持ち」を伝えている。

国際社会で求められる「積極性；主体性」の素地を育むためには、このように児童が自分の考え等（Abilities）をもち、ALT や友達と出来るだけ多くのコミュニケーション体験をすることである。したがって、「積極性」等に関する見取り方のポイントは、既述したように児童の中に Communication Abilities としての考え等があるかないかである。

Ⅱ.５　小学校「外国語活動」の最終的な目標である「国際的に通用するコミュニケーション力（資質・能力）」の素地の育みの中には、「共生の心（互いの思いやり：人権尊重）」も含まれる。なぜなら、国際的なコミュニケーションの場では「人権尊重」が第一義とされるからである。学校教育として不易の部分にあたる「共生」教育は、日本の小・中学校では、主に「道徳」の時間等において実施されるが、「外国語活動」でも十分育成されるので「道徳」と関連

付けて指導計画に含めるべきである。では、この「共生の心」はどのように育むことができるのであろうか。具体例を挙げて考察してみる。

これまで「外国語活動」を通じて児童が見せてきた「思いやりの心」は、主にグループ（3～5 人）活動に於いてであった。児童の中には外国語が大きな負荷となり、その結果、外国語を上手く駆使できない児童がいる。しかし、グループ活動だと助け合い支え合うことで、主体的に活動し目標を成就する変容振りが数多く見られた。

【例】：⑴ テーマ：「将来の夢を語ろう」（計 3 回の活動）⑵ 活動のねらい：「グループ内で、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす（＝高学年の「道徳」の教育内容）。」⑶ 活動の評価観点と評価規準：「① 観点：共生（思いやり）」、「② 規準：将来の夢を語り合うグループ活動を通じて、友達と協力して主体的に相手のなりたい職業を尋ねたり、答えたりしている。」⑷ 活動におけるコミュニケーションの働き：「① 相手の行動を促す。② 考えや意図を伝える。」⑸ 活動内容：「グループ間でのコミュニケーションに必要な基本的表現に慣れ親しんだ後、最後は、Ａ～Ｅのグループ間で、一人ずつ、互いに「将来の夢」について語り合う。」⑹ コミュニケーション例：A：Hello, Tomoko! // B：Hello, Kenta! // A：Can I ask a question? // B：Yes, please. // A：What do you want to be?（何になりたい？）// B：Teacher. // A：Teacher ? // B：Yes, teacher. // A：Why? // B：（Because）I like English. I like children. I like communication.（理由は日本語も容認）// A：Oh, great! // B：Thank you. // A：You're welcome. Bye! // B：Bye!

あるグループの K さんは、他グループの T さんから将来の夢に関する情報を入手する。

活動中の Q & A 形式の対話に自信がない場合、グループ内で助け合うか ALT に尋ねるように、予め指示しておく。また、質問と応答の対話は全員が体験する。さらには、入手した情報については各グループ内で整理し、予め準備された用紙に「誰がどのような夢を抱いているのか（理由も含めて）」記す。活動の仕上げは、ALT を交えて全員で、得た情報について提供し合う。その際、担任と ALT は、児童のコミュニケーションを支援する。

ところで、このような活動は、各自が自分の将来の夢について決定し発信しなければならない。それ故、常に自分自身の考え等を伝え合う英語特有のコミュニケーション力（「談話能力」）の素地及び基礎が養われる。しかし、本活動では、グループ活動を通して「共生の心」を育むことを重視する。なぜなら、教科型の授業では自己の力（資質・能力）を思うように発揮できない児童が、友達の協力を得て自己開示するようになるからである。また、友達の思いやりを感じ、グループ内で責任を果たし友達から認めてもらうことで自信を得る。したがって、このような活動は、児童ひとり一人の「個を育む」教育に繋がると言えよう。尚、本活動の見取り方のポイントは、友達同士で協力し合う場面である。

注

1）ability：a level of skill or intelligence（『Oxford 現代英英辞典』）；intelligence：知能、知性、理解力、思考力、（『ジーニアス英和辞典』）

2）M. Canale（1983）‘From Communicative　Competence to　Communicative Language Pedagogy’ in J. Richards and R. Schumidt（eds.）*Language and Communication*. London: Longman.（※ Canale の 4 つの Communicative　Competences の概念に筆者が加筆。）

3）これらは、文科省が 2005 年 8 月に全国の教育委員会に告知した『初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～　第 1 章　国際教育の意義と今後の在り方　1. 国際社会で求められる態度・能力』の中で掲げている内容である。

（2010.10.12 受稿，2010.11.10 受理）